神戸大学大学院
農学研究科地域連携センター
平成30年度 活動レポート

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1（A103号室）
Tel 078-803-5939　E-mail ans-chiiki@edu.kobe-u.ac.jp　オフィスアワー 火・金 13:00〜16:00

Center for Regional Partnership
Graduate School of Agricultural Science
Kobe University

地域連携センターの役割

近年大学では、教育、研究と並んで社会貢献の重要性が増してきています。農学研究科地域連携センターは、神戸大学が保有する知識や技術を、農山村地域の問題解決および価値創造において積極的に活用し、地域社会の発展に貢献することを目的に、2003年に創設されました。
地域連携センターに求められている主要な役割に、地域のシンクタンク機能、地域で働く人材養成機能、相談支援機能があります。こうした機能を果たすべく、地域住民、行政、NPO等と農学研究科を結び、その活動をサポートする中間支援の役割を担っています。同時に、センターが中心となり、共同研究、セミナー、ワークショップ、意見交換会などの地域交流を積極的に実施し、社会貢献を進めています。
農学研究科地域連携センターの主な事業は次の3つです。
(1)地域共同研究　(2)地域交流活動　(3)相談・情報発信
農学研究科は、「食料・環境・健康生命」に関わる諸問題を専門的かつ総合的に教育研究することを基本目的としています。当センターでは地域と知を共有し問題解決・価値創造に貢献することにより、ともに発展することを目指して、活動を進めていきます。

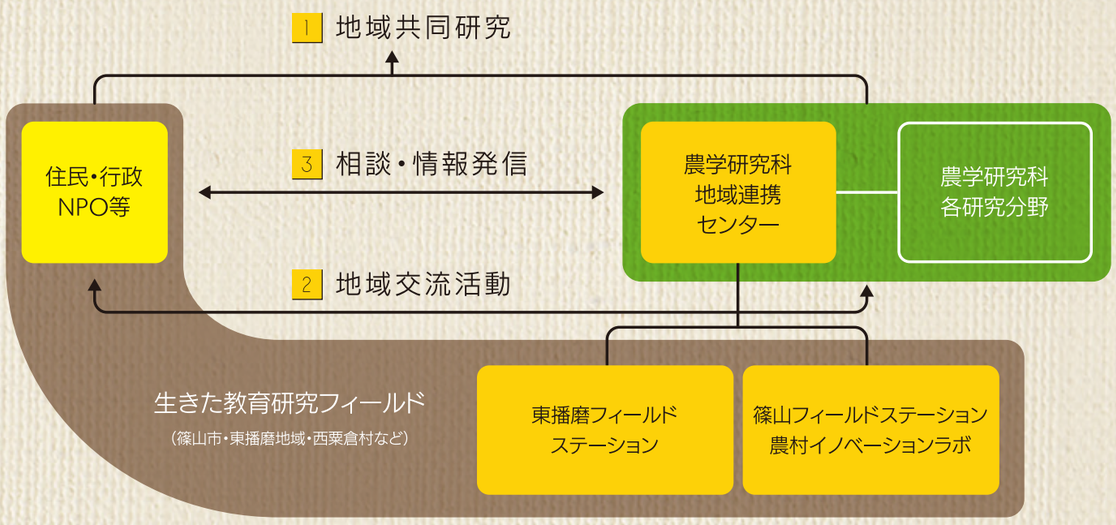
ごあいさつ

農学研究科では、これまで篠山市との地域連携協定（2007年度）に基づき、同市に設置された「篠山フィールドステーション」を拠点として連携活動を進めてきましたが、新たに兵庫県東播磨県民局・京都大学・兵庫県立大学との間に連携協定を締結し、地域のレジリエンス（状況変化に粘り強く適応する力）を高めていく拠点として「東播磨フィールドステーション」が2018年6月30日に開設されました。
また2015年度より、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」のプロジェクトのうち自然と環境領域に関する事業が、当センターを拠点として展開されており、その一環として地域づくりの基礎知識3「農業・農村の資源とマネジメント」を刊行しました。このほか、地域連携フォーラムの開催等を通じて、地域共同研究や地域交流活動の成果を公表しています。
この「活動レポート」は、2018年度に当センターが実施した活動をとりまとめたものです。我々の活動への理解を深めていただく一助となるとともに、地域の持続的な発展に役立てば幸いです。

田中丸治哉

組織体制

地域連携センターは、農学研究科および神戸大学地域連携推進室のもとに組織されています。常勤および非常勤の地域連携コーディネーターを中心に、農学研究科教職員や各種地域団体と連携を図りながら事業を推進しています。また、学内外の幅広い知見や情報、それに基づく助言を得るためアドバイザーを設置しています。



2018年度スタッフ

センター長	田中丸治哉　（生産環境工学講座 教授、神戸大学地域連携推進室長）
運営委員	松本文子（生産環境工学 助教）　黒田慶子（応用植物学 教授） 中塚雅也（食料環境経済学 准教授）　藍原祥子（応用生命化学　助教） 松尾栄子（応用動物学 助教）　鈴木武志（環境生物学 助教）
地域連携コーディネーター	木原奈穂子（特命助教）　衛藤彬史　（学術研究員） 柴崎浩平　（特命助教）　山野ゆかり　（事務補佐員）
アドバイザー	加古敏之（食料経済学分野 名誉教授）　高田　理（神戸大学元教授） 伊藤一幸（神戸大学元教授）　星　信彦（応用動物学 教授） 内平隆之（兵庫県立大学 地域創造機構 教授）

1 地域共同研究

連携先 岡山県英田郡西粟倉村

バイオエコノミーを基軸とした西粟倉村の持続可能な開発目標(SDGs)達成
長野宇規（地域共生計画学）
村内の二酸化素固定量を同定するため、西粟倉村の95%を占める森林について標高や施業状況別の年間生長量を分析した。

連携先 養父市、一般社団法人 田舎暮らし倶楽部

持続的な地域資源管理を可能にする地域内体制づくり
衛藤彬史（学術研究員）
農業経営の多角化と移住・定住促進に一体的に取組む地域活動団体を事例に、資源管理を進める上で要点となる人員体制の構築過程について、聞き取りと参与観察に基づき明らかにした。

連携先 岩本園芸、婦木農場(丹波市)

生産者と消費者の関係性からみた農業経営の持続可能性
中塚雅也（農業農村経営学）
丹波市内にある2つの農家を事例に、生産者と消費者の関係から農業経営の実態と問題点を調査し、経済的・社会的観点から現代における農業経営の持続性を考察した。

連携先 京都府京丹後市、NPO法人 気張るふるさと丹後町

ICTを活用した地域主体交通の展開可能性
衛藤彬史（学術研究員）
ICTを活用した地域独自の交通サービスを構築し、山間部において交通空白地問題を軽減している取組みを事例に、新たな交通サービスを地域社会に実装する上での方策について考察した。

連携先 神前ふるさとを守る会、NPO法人 チョロギ村(京都府亀岡市)

交通不便地域での持続的な送迎サービスの運営体制構築
衛藤彬史（学術研究員）
公的資金に頼らず、地域住民が送迎サービスを主体的に運営し、地域の足を確保するための取組みを導入する上での課題と要点について、体制づくりの観点から明らかにする。

連携先 仁方自治会(兵庫県佐用郡佐用町)

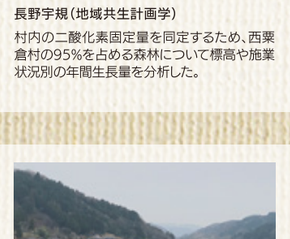
持続的な集落運営に向けたキャパシティ・ビルディング
衛藤彬史（学術研究員）
持続的な集落運営に向けて、地域課題の可視化と目指すべき集落の将来像を見定め、地域課題への関心と共通意識を高めていくための方策について、実証的手法に基づき検討する。

連携先 東播磨県民局ほか

非農家の視点からみたため池の価値とその創造
柴崎浩平（特命助教）
非農家にとってのため池の価値とはどのようなもので、それを創造していくためにはどうすればいいか。調査・ワークショップの開催を通して方向性を検討する。

連携先 東播磨県民局ほか

地域資源管理における後継者育成手法の開発
柴崎浩平（特命助教）
ため池を管理していくためには何ができないといけないか。また、現代にあった管理方法とはどのようなものか。ため池管理者への聞き取り調査を通して, 育成手法を検討していく。


連携先 兵庫県農政環境部ほか

兵庫県下における新規就農者の定着傾向
柴崎浩平（特命助教）
兵庫県下における新規就農者を対象にした質問表調査に基づき、就農形態（雇用就農・独立就農）ごとの定着傾向を明らかにし、支援方策について提言した。

連携先 南あわじ市

淡路島におけるたまねぎ農業システムの評価
中塚雅也（農業農村経営学）
淡路島三原平野のたまねぎを中心とした農業について、生産、歴史、ランドスケープなどの多角的な視点から評価分析し、水稲、たまねぎ、牧畜が複合循環的である農業システムの特徴を明らかにした。

連携先 篠山市

広域営農組織の設立が地域農業に与える影響
木原奈穂子（特命助教）
集落営農およびそれらの広域的な組織を設立し、農業生産および畦畔管理等の管理作業を請け負うことが、農業生産の維持のみならず集落の維持に寄与するかを検討する。

連携先 篠山市

地域ブランドの発展にかかる農産物認証制度への意識
木原奈穂子（特命助教）
既に国内においてブランドが確立された農産物に対する各種認証取得の意識調査および認証取得がブランドの発展に与える影響を明らかにする。

連携先 篠山市

新規就農者の定着に地域特産品が果たす役割
木原奈穂子（特命助教）
地域農業の維持発展に期待がかかる新規就農者に、地域特産品の生産を推奨することが安定的な経営および地域への定着に貢献するか否かを検討する。

連携先 篠山市、養父市

兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発
長野宇規（地域共生計画学）
衛星画像と美土里情報システムの農地GIS情報を組み合わせることで圃場毎筆の土地利用を判別する手法の開発を継続した。

連携先 真南条営農組合（篠山市）

新しい株間除草機構を用いた水田での実験
庄司浩一（生物生産機械工学）
水田での機械除草で難しいとされる、株間（田植機進行方向の株のすきま）の除草強度を簡単に調節できる機構を開発し、除草剤を施用しない水田にて実証する。

連携先 真南条営農組合（篠山市）

新しい特産品づくりに関する研究 ”香りヤマナシ”栽培の可能性
片山寛則（食資源教育研究センター）
遺伝的多様性の観点から、遺伝資源としてのヤマナシを保存するだけでなく利用しながらの保全を目指す中で、その一部を篠山市真南条集落に移植し、6次産業化に向け準備を進めている。

連携先 農都ささやま外来生物対策協議会

駆除した侵略的外来生物の活用方法の研究
鈴木武志（土壌学）
アカミミガメをはじめ、アメリカザリガニ、ブラックバス、ブルーギル等が篠山城跡堀での生息が確認されており、生態系への影響が問題視される中、駆除したこれら外来生物の有機肥料としての活用を目指す。

連携先 篠山市内の農家および猟師

里山植生の把握と森林資源の利用
黒田慶子（森林資源学）
篠山市の里山林で植生調査を行い、竹林伐採や薪生産などの資源利用の重要性を学んだ。また、猟師と連携してニホンジカの解体と食肉利用を体験し、里山管理を取り巻く課題を理解して解決方法を検討した。

連携先 篠山市

地域固有性の発現と農村発展モデルの確立
中塚雅也（農業農村経営学）
地域資源の「固有性」の本質を理論的に整理するともに、丹波・丹後地域を中心とした事例分析により、その地域固有性を見いだし、育てて、農村・農村の発展に繋げるためのフレームワークを提示した。

2 地域交流活動

フォーラム、研究会、セミナーの開催

フォーラムや研究会、セミナー等の開催を通じて相互理解を目指すとともに、知識を共有し地域の発展につながるような取組みを実施しています。

【実施の概要】

1. 地域連携研究会（A-Launch）
   2月5日「ため池の総合治水への活用」
   話題提供 田中丸 治哉（生産環境工学コース 水環境学教育研究分野 教授）
2. 地域連携セミナー
   7月2日「山間部でのIoTを活用した生活交通システムの協創的開発」
   話題提供 衛藤彬史（神戸大学大学院農学研究科 地域連携センター）
3. バイオエコノミー研究会
   第1回（10月3日）「バイオエコノミーとは何か」
   話題提供 長野宇規（神戸大学大学院農学研究科 地域共生計画学）
   第2回（11月6日）「地域がなぜエネルギー利用について考えるべきなのか -西粟倉村ローカルベンチャーを事例として-」
   話題提供 井筒耕平氏（株式会社sonraku 代表取締役）
4. 農の学び場（Rural Learning Network）の開催
   第26回（1月11日）「農と福祉の繋げ方：どのように進めればよいのか？」
   話題提供 中本英里氏（農研機構　西日本農業研究センター）
   第27回（3月8日）「EBPMとGIS：何を"見える化"して事業に繋げるか？」
   話題提供 丹羽英之氏（京都学園大学/篠山市農都環境アドバイザー）、谷川智穂氏（神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ）

農村ボランティア「ノラバ」事業

農村ボランティアバンクKOBE「ノラバ」の事務局として、ボランティアを必要とする農家と大学生・市民のマッチングを進めています。2018年末の全体登録者数は664名であり、昨年度より73件増加しました。

学生地域活動サポート

地域と連携した取組みを進める学生団体に対して、情報提供、情報発信のサポート、相談対応など、活動の発展と充実に向けて支援を実施しています。
今年度は、4団体（ささやまファン倶楽部、にしき恋、AGLOC、おくものがたり）による活動実施を支援しました。
合わせて、篠山市において活動を実施する活動団体間で相互の情報共有を図ることを目的に、「篠山学生活動団体連絡協議会」を組織しており、運営を支援しています。
また、学内における取組みとして、篠山市で活動する学生団体が農家とともに生産した農作物（黒大豆等）の直売所として「ささやま家（や）」を2013年度より設けており、生産から販売までの過程を経験する機会となっています（今年度は4回開催）。販売収益は、交通費等の学生活動団体の活動資金として活用しております。

地域農産物販売による地域PR

にしき恋

神戸大学内や新大阪など都市部のマルシェにおいて、活動地域である篠山市西紀南地区の特産品の丹波篠山黒枝豆や黒大豆を販売しています。どのように販売すればよりよい地域PRとなるか考えながら取り組みました。

世界に向けた地域の魅力発信

AGLOC

地域の魅力を世界に発信するため、多言語による動画作成や特産品開発に取り組みました。タイ語と日本語の両方でつくった作品で、「丹波篠山ビデオ大賞」にエントリーし、「ささやま新発見賞」を受賞しました。

イベント実施による地域活性化

にしき恋

篠山市西紀南地区において、小中学生との交流会、地域の方々との懇親会や活動報告会など、交流イベントを開催することで、にしき恋の活動を知ってもらうとともに、若い力で地域に活気をもたらすよう取り組みました。

留学生と農村地域の交流促進

AGLOC

神戸大学の留学生に、日本の農村地域の魅力を感じてもらうため、篠山市の岡野地区で一緒に農業体験を行っています。また、10月末には1泊2日の"Welcome Camp"を行い、2018年は昨年度の2倍以上である約20人の留学生と篠山の魅力を存分に味わいました。

地域の拠点活用策の提案

おくものがたり

現在、篠山市大芋地区では、閉校した小学校の利活用策を検討しています。おくものがたりは、そこで企画されるイベントのお手伝いや、住民と大学生の交流を促すイベント等に取り組みながら、利活用アイデアを考えています。

「食と農林漁業大学生アワード2018」への参加

AGLOC　にしき恋

農林水産省主催の食や農林漁業に関わる取組みを行う大学生グループの活動発表コンテストに、篠山市で活動を行うにしき恋とAGLOCがファイナリストとして選出されました。日頃の活動内容やその成果について発表しました。

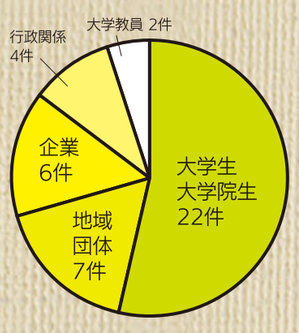
3 相談・情報発信

ホームページ等による情報発信

大学と地域をつなぐ拠点として、日々、所属するスタッフが相談に応じたり、情報発信を行ったりしています。
2018年（1月-12月）は41件の相談が寄せられました。相談内容は、学生の地域活動やイベント等、広報協力依頼の相談が若干多めではありますが、その内容は多岐にわたっています。また、地域活動に関する情報を、ウェブページやSNS を通じて随時発信しています。

オフィスアワーの実施

地域と農学研究科をつなぐ窓口として、情報の受発信を行い、各種相談に応じています。具体的なレベルの相談は、本年度は41件（企業6件、地域団体7件、行政関係4件、大学（院）生22件、大学教員2件）でした。
相談内容としては、事業や施策に関するアドバイス依頼、連携センターとの協働事業の立ち上げ、農学部への共同研究、学生地域活動についての相談、イベント告知への協力などでした。



オープンキャンパスでの展示

2018 年8月に実施された神戸大学農学部のオープンキャンパスにおいて、食農コープ教育プログラムのカリキュラムや授業の様子などをパネル紹介しました。そのほか、食農コープ教育の授業を通じて結成された学生活動団体の活動についても学生らが自ら紹介しました。

4 食農コープ教育プログラムの推進

農学部では、食や農の現場において課題解決に貢献できる人材の育成を目指し、協力教員とともに「食農コープ教育プラグラム」に取組んでいます。特に、現場での実践活動を伴う科目の内容を充実させるよう取組みを進めてきており、当センターはプログラムの事務局として、次の3つの科目の運営を支援してきました。

1年次 → 現場に行ってみよう
2年次 → 専門知識を増やしながら実践経験を重ねよう
3年次 → 経験と知識を融合させよう
4年次 →

農家に師事する
実践農学入門　1年次通年（選択2単位）

農村地域（篠山市）において、地元の農家さんを指導員とし、農作物の栽培や、さまざまなむら仕事を体験しながら、農業や農村生活の理解を深めることを目的としています。
今年度は、村雲まちづくり協議会を受け入れ先として、56名の学生が13戸の農家に分かれて黒大豆の栽培を中心とした農作業を体験しました。

現場の課題に参画　実践農学　2年次通年（選択2単位）

農業農村の現場での調査やインターンシップ型のプロジェクトへ参加し、農村地域の産業・環境・社会を理解するための基礎的な技術や能力、および企画立案や調整能力といった実践的な力を身に付けることを目的としています。
今年度は、計25名の履修者が、4つのテーマに分かれ活動しました。

支える仕組みを学ぶ　兵庫県農業環境論A／B　2年次 第3Q／第4Q（選択1単位）

国内での兵庫県の農林水産業の位置づけ、現状と課題、政策展開を体系的に正しく理解し、批判的に評価した上で、適切な対策を提案する力を養うことを目的としています。
兵庫県農業環境論Aでは、兵庫県職員、農水省職員、JA職員等を講師に迎え、オムニバス形式で講義を実施しました。

兵庫県農業環境論Bでは、「新規就農者を増やすためには」、「兵庫県産畜産物のブランド力を強化するには」の2つのテーマで政策立案に向けたワークショップを実施しました。県行政の政策担当者への施策提案と、フィードバックを通じて、政策立案の難しさと奥深さ、面白さの体感を目指しました。